

# 名勝・臼井八景

じょう

れい

せき

しょう

## 城嶺夕照

いく夕べ入日を峯に送るらん

むかしの遠くなれる古跡

永久二年（一一一四）に千葉常兼の三男 常康が初めて臼井の地を治めて以来、十六代臼井久胤までの約四百五年間、臼井氏は長くこの地の領主であった。その後の臼井城は原氏や徳川家康の家臣酒井家次の居城となつたが、文禄二年（一五九三）の火事によつて、この台地にあつた城郭は焼失してしまつた。臼井八景は、それからおよそ百年後の元禄期に作られたものである。臼井久胤の玄孫にあたる臼井八景の作者は、夕映えの美しい城跡の嶺に立つて、自分の祖先が臼井城の城主であつた頃の遠い昔を偲びながら、感慨深く前掲の歌を作り上げたものである。

城跡には、往時の土塁や空堀の一部が今でも昔のままに残つてゐる。本丸跡の発掘調査により、十五世紀の中国・明時代の陶磁器の破片や、城が火事になつた時の焼け米などが発見されている。

北側の山裾には、第六代城主臼井興胤が一三三八年に創建した瑞湖山円応寺がある。また空堀の近くには文明十一年（一四七九）に臼井城を攻めて討死した太田道灌の弟（甥とも伝わる）、図書の墓がある。